

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成21年12月16日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 特任助教

氏 名 金 子 守 恵

事業区分	平成21年度・国際研究集会派遣助成		
研究集会名	第17回国際エチオピア学会		
発表題目	束ねる:エチオピア西南部における生活を営む技術		
開催場所	エチオピア・アジスアベバ市・アジス・アベバ大学 エチオピア研究所		
渡航期間	平成21年10月31日 ~ 平成21年11月24日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有(プログラム、アブストラクト集)		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円	
	使用した助成金額	150,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	・航空チケット代(往路分:関西空港~アジスアベバ)	100,000円
		・日当・宿泊費(11月1日~11月5日)	50,000円
	合計:150,000円		

成 果 の 概 要

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

特任助教 金子守恵

- ・ 集会の名称：(和文) 第 17 回国際エチオピア学会
The 17th International conference of Ethiopian Studies
- ・ 主 催 者：アジスアベバ大学 エチオピア研究所
Addis Ababa University, Institute of Ethiopian Studies
- ・ 開催期間：平成 21 年 11 月 2 日 ~ 平成 21 年 11 月 5 日
- ・ 発表題目：束ねる：エチオピア西南部における生活を営む技術
Binding: Techniques for Maintaining a Livelihood in Southwestern Ethiopia

国際学会の概要

この国際学会は、エチオピアに関する人文科学(考古学、言語学、宗教学、美学、芸術学、人類学、政治学、法学)や自然科学をバックグラウンドとする世界各国の研究者たちが集まって 2~4 年に一度開催される。今回は、主催機関であるアジスアベバ大学エチオピア研究所の 50 周年記念ということもあり、これまでのエチオピア研究にまとめた文献録集が発刊されるなど、さまざまな点においてこれまでとは異なる記念すべき大会となった。

成果の概要(1): 研究発表の概要

研究発表では、エチオピア西南部高地で定住的な農耕活動をおこなうアリの人びとが、エンセーテ(Ensete ventricosum、エチオピア起源のバショウ科植物)の繊維をつかってコーヒーの青葉を「束ねる(*zoku*)」という行為に注目し、束ね方や束ねたまとまりが人々の生活においてはたす役割とその特徴についてあきらかにすることを目的とした。調査・研究対象であるコーヒーの青葉は、人々が日常的に飲用する材料であり、その束は市場において物々交換や売買の単位としての役割を担っていた。それと同時に、その単位は、農家の夫人たちの腕と手の大きさを尺度にして作りだされており、人々の経済的な行為、環境への一定の関わりを示す身体的な行為(身体技法)、さらには食料の消費量な

ど、人々の生活におけるさまざまな側面を検討できる対象と位置づけることができた。ここ5～6年のあいだにエチオピア国内でもものの価格が高騰するなか、この単位はその大きさを变化させることはなかったことがあきらかになった。経済的な要素だけでは、この地域の市場の動態について十分にとらえきれないことがみいだされた。

今回の発表は、エチオピア全土にわたる経済的な動向や、西南部の地域社会における社会文化的な文脈を広く把握することによって理解可能となるテーマであったので、数多くの分野の研究者とのさまざまな情報について意見交換することが目的のひとつであった。以下では、学会への参加・発表、交流について得られた成果をまとめた。

成果の概要(2): エチオピア西南部の研究動向

エチオピア西南部は、1960年代から人類学者が長期にわたるフィールドワークをもとにした調査研究をつづけてきた地域である。その背景のひとつとして、さまざまに異なる言語集団や生業活動に従事する人びとがくらしを営んでいるということがあげられ、現在においても人類の起源や進化のプロセスを解明する調査研究がこの地域を対象にしてすすめられている。そのなかでも、11月3日におこなわれた人間の遺伝的な変異と分布についての予備調査報告が非常に興味ぶかかった。(Dr. Bradman Neil et al, London Univ., "The scale and distribution of human genetic diversity of and among the peoples of Ethiopia and Implications for the study of demographic histories, pharmacogenetics and health care") 予備調査の段階であったため十分なサンプル数が収集できていないが、エチオピア国内においてもとくに西南部の遺伝的多様性が非常に高いことを示唆する結果であった。現在では、「出アフリカ説(Out of Africa theory アフリカ以外にすむ現生人類は、10万年以上前にアフリカから移動した者たちの子孫であるとする説)」が非常に有力であるが、今回の報告はエチオピアの西南部が現生人類の多様性の出発点であることを十分に示唆するものといえた。これをより広く理解していくためには、西南部地域の社会文化的状況とのすりあわせが必要であることが言及された。私が調査対象としている地域や民族は、高い遺伝的多様性の中心に位置しており、社会的集団間の関係や、農産物などをはじめとしたものを介した社会的なネットワークを分析対象としてふまえると、より興味ぶかい事実がみいだされることが予見された。これに加えて、会場に

おける中心的な議論は、遺伝的な研究をおこなううえで問題となる倫理的な側面についてであり、これについては遺伝的な距離は単純に科学的な発見としてあつかわれるものであり、人類の優劣を示唆するようなものとしてとりあつかうべきではないことが確認された。

成果の概要 (3): エチオピアにおける研究と開発実践との融合について

非常に多くの分野で特徴的であったのは、調査研究と開発実践を融合させて、エチオピアが現在直面しているさまざまな問題を解決しようとしている視点や立場にたった報告がおおかったことである。たとえば、エチオピアのいくつかの地域で頻発している紛争について、在来の知や経験を活用して紛争解決する取り組みや可能性についての報告やエイズをはじめとした病への在来の対応の仕方や役割などについての報告があった。また、20 年以上にわたってエチオピアでフィールドワークをおこなってきた、スウェーデン、ノルウェー、日本の人類学者が、それぞれのフィールドで直面している現代的な問題（とくに開発実践にかかわること）について報告をおこない、長期間のフィールドワークを基礎にした調査研究の重要性と開発実践において積極的な役割を果たす可能性について考察をふかめるよい契機となった。（Nov. 3rd: Eva Poluha, “Promotion of change and the current aid discourse: A discussion based on experiences from the Dodota water scheme”, Harald Aspen, “Peasant entrepreneurs in emergent towns in Maqet warada, North Walo”, Masayoshi Shigeta, “On the Enset project: Futurability of “tree against Hunger” in Ethiopia”）